言語活動

古典の和歌を現代の言葉で書き換える

俵 万智（たわら まち）

古典の現代語訳をするとき、和歌の部分は、とくに長くなってしまうのが常である。たとえば、

花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせし間に[1]　小野小町[2]

この歌の訳を、今手もとにある古語辞典で引いてみよう。

「桜の花の色は、早くもあせてしまったことだなあ。なすこともなく、降り続く長雨に日を過ごしていたその間に……。と同時に、私の容色も衰えてしまったな。むなしい恋の思いに明け暮れて、ぼんやりもの思いにふけっている間に。（『ふる』は『経る』と『降る』、『ながめ』は『眺め』と『長雨』の掛詞。『降る』と『長雨』は縁語。小倉百人一首の一つ）」とある。訳文は、もとの歌の三倍以上の長さだ。

たった三十一文字の中に、いかに豊かな内容を盛り込もうかと、歌人たちは苦労してきた。右の歌に使われている掛詞などの技法も、その一つである。つまり和歌は、散文とは比べものにならないほど、密度の濃い言葉の集約となっている。それを、わかりやすく読み解き、現代の散文で読みほぐしてゆけば、長くなるのは当然のことではある。

が、その結果、もとの歌が持っていた韻律[3]の美しさが失われてしまうことの、もったいなさ。意味がわかったうえで、もう一度和歌に戻ればいいという意見もあるだろうが、もう少し本来のリズムを、訳に生かせないものだろうか、と思った。リズムだって、作品のうちなのだから。

そんな思いから、私は一つの試みをしたことがある。『伊勢物語[4]』を、中学生ぐらいを対象にして現代語訳するという仕事の中で、登場する和歌をすべて、現代の三十一文字に訳してみたのである。

『伊勢物語』は歌物語と言って、すべての章に中心的な存在として和歌が出てくる。一首の和歌を生かすために、物語があると言ってもいいぐらいである。地の文を訳していって、さあいよいよ主役の和歌が登場！　というときに、だらだら長い説明文のような現代語では、物語本来の味が損なわれてしまう。なるべくリズムのある訳にしよう……ということを突き詰めていくと、結局同じ三十一文字がベストだ、ということになった。

思いつきはよかったが、予想どおり、作業は大変だった。いかに古典和歌一首にこめられた情報量が多いかが、身をもってよくわかった。だからある程度、「意味」の部分で

■**俵万智**　一九六二―。歌人。大阪府生まれ。口語を巧みに取り入れた歌風で知られる。歌集に『サラダ記念日』『チョコレート革命』などがある。本文は『言葉の虫めがね』所収の「短歌を訳す」によった。

1 花の色は…　『古今集』巻二・春下所収。
2 小野小町　二九五ページ注16参照。
3 韻律　韻文の持つ言葉のリズム。和歌では、とくに五七五七七の音数律のこと。
4 伊勢物語　二五一ページ解説参照。

は省略せざるを得ない。しかしその分「リズム」の魅力は残すことができる。そして「意味」のほうは地の文などで、なるべく補うように心がけた。

その現代語訳というのは、たとえば、

[5]月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

は、

おなじ月おなじ春ではなくなっておなじ心の我だけがいる

また、

[6]天雲(あまぐも)のよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆるものから

は、

天雲のようによそよそしいあなた目には見えても手はとどかない

もう一つあげると、

[7]あらたまの年の三年(みとせ)を待ちわびてただ今宵こそ新枕(にひまくら)すれ

は、

三年を君にささげてまちわびて今夜打たれるはずのピリオド

という具合である。原文と突き合わせながら理解するのではなく、いきなり読んでおもしろいということが、若い読者には大切だ。

その思いが通じたのか、読者や、そして研究者の先生方からの評判がとてもよく、努力が報われた思いだった。

5 月やあらぬ…『伊勢物語』第四段所収。現代語訳は、「月は(昔の月では)ないのか。春は昔の春ではないのか。私のこの身だけがもとのままであって」。

6 天雲の…『伊勢物語』第十九段所収。現代語訳は、「大空の雲のようにはるかに遠く、よそよそしくあなたはなっていくのか。そうはいっても(私の)目には(あなたの姿が)見えるのに」。

7 あらたまの…『伊勢物語』第二十四段所収。現代語訳は、「三年という年月、(あなたを)待ちくたびれて、ちょうど今夜(新しい夫と)新枕をかわすのだ」。「あらたまの」は、「年」にかかる枕詞。

課題

1 本文で取り上げられている『伊勢物語』中の三首の歌から一首を選び、筆者の作例を参考にしながら、自分のイメージと言葉で歌を書き換えてみよう。

2 冒頭にあげられている小野小町の歌を、現代の言葉で書き換えてみよう。